

原始仏教に見られる在家者の解脱・涅槃

村 上 勉

0 問題の所在

初期經典¹⁾では、在家者に対して、解脱・涅槃を説いた教説は少ない。在家者が布施を為し、道徳的に善行を行ったならば、天の世界に生まれるという、施・戒・生天論を説いている教説が主である。死後に天の世界に生まれるということは、古代インドにおいての理想である²⁾。しかし、この施・戒・生天論の枠内では、在家者でいる限り、輪廻・苦の世界から解脱することは出来ない。どのような天界に生まれても、輪廻の世界の範囲内であり、天界に生まれるということは解脱を意味するものでない。平川彰は³⁾、在家者は、出家者の生活を維持してゆくために、布施をなすだけの存在になってしまう。しかし、釈尊が、このような意味で在家の仏教徒を認められたとは考えがたい。在家者は在家者の立場で、仏教的修行をなしうることを認めて、優婆塞、優婆夷を認められたのであらうと思うと述べている⁴⁾。筆者は、解脱・涅槃を求め、出世間の実践をする在家者の存在について論述した⁵⁾。本稿では、初期經典に基づ

1) 本小論で対象とする原典は、主に、DN・MN・SN・AN・Vin の相当漢訳が存在するものと、成立が古いと言われている韻文資料、Sn・Th・Thī とする。尚、相当漢訳がない場合は、その当該資料の構成キーワードの用例を分析して資料の価値を判断する。

2) 中村元 [1993: p. 972]。

3) 平川彰 [1990: p. 972]。

4) 藤田宏達 [1971: p. 414] で「当時の在家信者の大多数は、施・戒・生天の三論に満足し、これを超えて仏教本来の教説を求める者は少なかったようである。また、かりに本来的な教説を求めても、それを実現することは、在家の生活のままでは実際には極めて困難であったことも確かである」と述べている。

5) 村上勉 [2018: pp. 37-52]。

き、出世間道の実践の結果、解脱・涅槃に至った在家者が存在したことについて論述する。

1 原始仏教に見られる在家観

施・戒・生天論と梵行 (brahmacariya) の実践について、Sn *Uraga-vagga* に次の様な教説がある。

Saddhāya taratī oghaṃ appamādena aṇṇavaṃ
viriyena dukkhaṃ acceti paññāya parisujjhati (Sn 184)

信によって洪水を渡り、不放逸によって海を渡る。勤めることによって苦を越え、智慧によって完全に清浄となる。

Yass' ete catturo dhammā saddhassa gharamesino
saccaṃ dhammo dhiti cāgo sa ve pecca na socati (Sn 188)

信あり、在家の生活する者には、真実、教え、堅実、施与というこれら4つの勝れた特性がある者には、彼は死後に、憂えることはない。

これらは、信が最上の財産であり、その信のある在家者は、真実、教え、堅実、施与の実践によって来世に果報があると説いている。施・戒・生天論である。

次は、ダニヤへの教説であるが、

Lābhā vata no anappakā ye mayam Bhavantaṃ addasāma
saraṇaṃ taṃ upema cakkhuma satthā no hohi tuvam mahāmuni (Sn 31)

私達は多くのものを得たことか、私達は尊師にお目にかかれたことは、眼ある方よ、私達は貴方に帰依します。大いなる沈黙の聖者よ、貴方は我々の師になってください。

Gopī ca ahañ ca assavā brahmacariyaṃ Sugate carāmaṃ
jātimaraṇassa pāragā dukkhass' antakarā bhavāmaṃ. (Sn 32)

ゴピー（妻）も私も共に従順であります。私達は、善逝のもとで梵行を行いましょう。私達は、生死の彼岸に達して、苦しみの終わりを為すものと成るでしょう。

ここでは、釈尊の教えを聞いて牛飼いのダニヤは夫婦で brahmacariya（梵行）の

実践を誓い、生死の彼岸に達して苦しみを滅ぼしましょうと述べている。この偈は、施・戒・生天論に満足せず高い境地を目指すものであり、夫婦で高い境地を目指して実践しようとしていた人達がいたことを示している。

2 比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に同じ教説の教示

SN 47.12.⁶⁾では、覚りを得るための七覚支の修習について述べ、続いて

……Sādhū sādhū Sāriputta tasmā ti ha tvam Sāriputta imam dhammapariyāyam abhikkhaṇam bhāseyyāsi bhikkhūnam bhikkhūnīnam upāsakānam upāsikānam, yesam pi hi Sāriputta moghapurisānam bhavissati Tathāgate kaṅkhā vā vimati vā tesam pi mam dhammapariyāyam sutvā yā tesam Tathāgate kaṅkhā vā vimati vā sā pahīyissatī ti.

……（世尊）善い哉、善い哉、サーリプッタよ、それ故に、あなたは、サーリプッタよ、この法門をしばしば、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の為に説きなさい。サーリプッタよ、愚かな者たちに、如来に対する疑惑と混迷があろうとも、私のこの法門を聞けば、これらの如来に対する疑惑と混迷は捨てられるだろう。

釈尊は、サーリプッタに七覚支の修習について、出家者と在家者それぞれにこの教説を説くように勧めている。その目的は釈尊への疑惑や混乱を捨てさせるためであるという。

しかし、MN 143. *Anāthapiṇḍikovāda-sutta*⁷⁾では、以下のように在家者に説く教説と出家者に説く教説は異なると説かれている。

Evam vutte Anāthapiṇḍiko gahapati parody assūni pavattesi. Atha kho āyasmā Ānando Anāthapiṇḍikaṃ gahapatiṃ etad avoca: Olīyasi kho tvam, gahapati, saṃsīdasi kho tvam gahapatīti?

この様に言われた時、アナータピンディカ長者は泣き出し涙を流した。時

6) SN V, p. 161.

7) MN , p. 261. (当該漢訳は、『中阿含経』大一、四五八 b 一四六一 b)。

にアーナンダ長老はアナータピンディカ長老にこの様に言った。「長老よ、あなたは執著しているのですか、長老よ、あなたは消沈しているのですか」と。

Nāhaṃ bhante Ānanda, olīyāmi, na saṃsīdāmi. Api me dīgharattaṃ Satthā payirupāsito, manobhāvanīyo ca bhikkhū, na ca me evarūpī dhammī kathā sutapubbā ti.

Na kho, gahapati, gihīnaṃ odātavaśanānaṃ evarūpī dhammī kathā paṭibhātī. Pabbajitānaṃ kho, gahapati, evarūpī dhammī kathā paṭibhātīti.

「大徳アーナンダよ、私は執著していません。消沈していません。また、長夜に私は尊師を尊敬してきました。そして心を修習しているものである比丘達を（尊敬してきました）。しかし、私はこの様な教えは以前に聞いていない」と。「長老よ、白衣の在家者達にこの様な教えは明らかにしない。比丘達にだけに、この様な教えは明らかにする」と。

この資料から、出家者に説く教説と在家者へのものは違っていたと主張することが出来るが、しかし、ここでは、アーナンダを伴った、サーリプッタが重病のアナータピンディカに六根・六境・六識……四無色処等の一切を執著しないよう学ぶべきであると説いた時、アナータピンディカは涙を流したとある。ところが、初期經典で釈尊がアナータピンディカ長老に説いた教説を見ると、AN 5.176.⁸⁾では、釈尊は

Tumhe kho gahapati bhikkhusaṅghaṃ paccupaṭṭhitā cīvarapiṇḍapātasenāsana-gilānapaccayabhesajjaparikkhārena. Na kho gahapati tāvataken` eva tuṭṭhi karaṇīyā` mayam bhikkhusaṅghaṃ paccupaṭṭhitā cīvarapiṇḍapātasenāsana-gilānapaccaya-bhesajjaparikkhārenā` ti. Tasmā ti ha gahapati evaṃ sikkhitabbaṃ: Kinti mayam kālena kālaṃ pavivekaṃ pītiṃ upasampajja vihāreyyāmā ti. Evaṃ hi vo gahapati sikkhitabbaṃ ti.

「長老よ、あなた達は、比丘僧伽に、衣服、飲食、床坐、治療薬及び資具を供給している。長老よ、『私達は、比丘僧伽に、衣服、飲食、床坐、治

8) AN V, p. 176. (当該漢訳 大二、一二二c)。

療薬及び資具を供給している』と、これだけで満足すべきではない。それで、長者よ、当にこのように、学ぶべきである。『私達は、如何にして、時々、遠離という喜びを、獲得して住むべきか』と、長者よ、当に、このように学ぶべきである。

特筆すべきは、釈尊が、「在家者は布施をすることだけで満足するな。在家の生活を続けながら欲楽を離れて時間を過ごせ」と説いているのである。

また、SN 55.28.⁹⁾は、釈尊がアナータピンディカに説いたものであるが、非常に重要な仏教教理が示されている。釈尊は、聖なる弟子は五戒を実践し、四不壊浄を成就し、慧をもって、聖なる真理 (ariya ṇāya) をよく観じ、よく通達する時は、もし欲するならば、自ら記別することを得る。すなわち、『私に於いて、地獄は滅尽し、畜生は滅尽し……聖者の流れに入った者 (預流) であり、悪い場所に堕ちない性質のものであり、決定した者であり、正しい覺りに至る者である。』と。四不壊浄とは、「ここに聖なる弟子有り、仏に於いて不壊浄を成就する、即ち、『彼世尊は応供・正等覺・明行足・善逝……仏・世尊なり』と、法に於いて不壊浄を成就する、僧において不壊浄を成就する、聖者所樂の戒を成就する。この四つの不壊浄を成就することである。慧をもって、聖なる真理 (ariya ṇāya) をよく観じ、よく通達するとは、縁起を真に作意することである。『彼有るが故にこれ有り。彼生ずる故にこれ生ず。彼無きが故にこれ無く。彼滅するが故にこれ滅す。無明を縁として行生じ、行を縁として識生じ……生を縁として、老死生じ、愁悲苦憂悩生ず。このようなものは、これ一切の苦蘊の集起なり。また、無明が離滅するが故に行滅す……生滅するが故に老死愁悲苦憂悩滅す。これ一切の苦蘊の滅なり』。これが、慧を以て聖なる真理 (ariya ṇāya) をよく観じ、よく通達す、の意味である。すなわち、慧をもって、聖なる聖なる真理 (ariya ṇāya) をよく観じ、よく通達するとは、縁起を真に作意することであると説かれ、十二支縁起が説かれている。また、五戒・四不壊浄を実践し、慧をもって十二支縁起をよく観じ、通達すれば正しい覺りに至るとある。

9) SN V, pp. 387-389. (当該漢訳 大二、二一六 a)。

これら AN 5.176. 及び SN55.28. から見えてくるアナータピンディカの姿は仏教教理に深い造詣を有していることが理解できる。また、AN 10.93.¹⁰⁾ では「世間は常住なり」と主張する外道修行者を「世間は無常であり苦であり、苦なるものは私のものでない」と論破し、釈尊が比丘達に「具足戒を受けて100年経つ比丘もアナータピンディカ長者を見習いなさい」と説いている。

MN 143.¹¹⁾ の「白衣の在家者達にこの様な法話は明らかにしない。比丘達にだけ、この様な法話は明らかにする」は、特殊なもので、初期經典の範囲では、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に対して教説が同じように説かれていたと考えるのが妥当であると思う。

3 二つの在家実践道（世間道と出世間道）

原始仏教の時代には、在家者達も布薩の実践を通じ、梵行の実践は身近な存在であった。舟橋一哉は「従来、一般には漠然と、出家道は出世間道であり、在家道は世間道である、というように、截然と区別して考えていたようである。この場合の出世間道とは、迷いの生存であるところの、生死を厭離して、梵行を修することによって、解脱涅槃に至ることを目的とするものであって、四諦・十二縁起・八聖道などの教説はすべてこの側に属するものである。また、世間道とは、生死の中にありながら、天界の楽なる果報を得るために福德（功德）を修することを勧めるものであって、その代表的な説法は施論・戒論・生天論である¹²⁾」と述べているが、初期經典の在家者への教説を注意深く検討すると、在家実践道は、二つ道が存在していたとの結論に到達する。

即ち、一般的な日常生活を送りながら、布施に勤しみ、五戒・八斎戒を護り、死後善処に生まれることを願う人々の求道と、出家の門は常に開かれていたけ

10) A N V, p. 189. (Yo pi so bhikkhave bhikkhu vassasatupasampanno imasmim dhammavinaye, so pi evam evam aññatitthiye paribbājake saha dhammena suniggahītaṃ niggaṇheyya. Yathā taṃ Anāthapiṇḍikena gahapatinā niggaḥitā ti.)

11) MN 143. *Anāthapiṇḍikovāda-sutta* の当該漢訳は無い。

12) 舟橋一哉 [1970: pp. 175-196]。

れども、何らかの理由から出家出来ず、在家の生活を続けながら、諸欲を断じ梵行を実践し、解脱に至る究極の理想を求めた人々の求道である。原始仏教の時代にそれを目指す人がいたことを初期經典は伝えているのである。

次の教説 MN 73. *Mahā-Vaccha-sutta*¹³⁾ は、釈尊がヴァッチャゴッタ遍歴行者に説いたものであるが、在家の白衣の梵行者 (*brahmacārin*) の存在を明らかにしている。

ヴァッチャゴッタ遍歴行者は釈尊に「尊者ゴータマの優婆塞にして在家の白衣の梵行者 (*brahmacārin*) なる者、五下分結¹⁴⁾の滅尽によって化生者となり、そこにおいて般涅槃し、その世界から還ることがない優婆塞は、一人でもいるでしょうか」との質問に、釈尊は「400人でもなく、500人でもなく、さらに多くいる」と答える。さらに、ヴァッチャゴッタの「尊者ゴータマの優婆塞にして在家・白衣者にして受欲者 (*kāmabhogin*) として、教えと戒を守り、疑いを超え、疑惑を離れ、自信を得て、他に依存することなく、師の教えに住んでいる優婆塞は一人でもいるでしょうか」との質問に、釈尊は「多くいる」と答えている。引き続き、ヴァッチャゴッタは、

Seyyathā pi bho Gotama Gaṅgā nadī samuddanninnā samuddapoṇā samuddapabbhārā samuddaṃ āhacca tiṭṭhati, evam-evāyaṃ bho Gotamassa parisā sagahaṭṭhapabbajitā nibbānaninnā nibbānapoṇā nibbānapabbhārā nibbānaṃ āhacca tiṭṭhati

例えば、ゴータマ尊よ、ガンジス河が大海に趣き、大海に傾き、大海に傾斜して大海に触れて留まるように、まさにその様に、ゴータマ尊の在家と出家を伴える人々は涅槃に趣き、涅槃に傾き、涅槃に触れて留まる。

と語っている。すなわち、この教説は、家に居て欲を離れ、梵行者として実践する在家者と、家で普通に欲望を享受する者との二種類の在家者がいることを明らかにしている。在家と出家を伴える人々は涅槃に趣き、涅槃に傾き、涅槃

13) MN I, p. 493. 当該漢訳を見るとパーリ・漢訳はほぼ一致している。『雜阿含經』(大二、二四六 b 一二四七 c) (婆蹉白佛。如天大雨水流隨下。瞿曇法律亦復如是。比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。若男若女。悉皆隨流。向於涅槃。沒輪涅槃)。

14) 五下分結 (欲貪 瞋恚 有身見 疑 戒禁取)。

に触れて留まると述べている。

この教説について藤田宏達¹⁵⁾は「(ここでは) 注目すべき表現を用いている。それは、在家者に対しても、梵行者 (brahmacārin) という語を適用していることと、在家者も涅槃に趣向すると述べていることである。もっとも、これに類同する経句は他にも見いだせるが決して多くはない。一般的に言えば、梵行者は出家者について用いられるものであるし、また在家者が涅槃に趣向するというのは、少ない例と云わねばならない」と述べている。藤田宏達は在家の梵行者 (brahmacārin) に注目をしているが、この在家の梵行者について「在家阿羅漢論」では、踏み込んで論考していない。

初期經典から在家・梵行者 (brahmacārin) を眺めると、古い成立と考えられる韻文 (偈) で説かれている八斎戒は、五番目が「梵行」であり、AN 8.21.¹⁶⁾ でウツガ長者が受持した、「梵行を第五とする学処」とは、偈文に現れる八斎戒であると考えられる。八斎戒は布薩 (uposatha) の日に実践されるものである。ウツガ長者は、「姉妹よ、梵行を第五とする学処は私によって受持されている。貴方たちが望むなら、ここで財を受用せよ、また福を為せ。自分の親戚の家に行け。または、男に対する欲があれば、私は、誰にでもあなた達を与えるだろう。また私は若い妻を捨てても心の変化がない」と述べている。ここでは、ウツガ長者は「姉妹よ、梵行を第五とする学処は私によって受持されている¹⁷⁾」と語って若い妻たちと離別している。日常的に八斎戒を実践する決意を述べているのである。これが初期經典に現れる、在家・梵行者 (brahmacārin) の実践である。

次に、AN 10.75.¹⁸⁾ では、ミガサーラー優婆夷がアーナンダに質問している。

Kathamkathā nāmāyaṃ bhante Ānanda Bhagavatā dhammo desito aññeyyo, yatra hi nāma brahmacārī ca abrahmacārī ca ubho samasamagatikā bhavissanti abhisamparāyaṃ? Pitā me bhante Purāṇo brahmacārī ahosi ārācārī virato methunā

15) 藤田宏達 [1964: p. 66]。

16) AN IV, p. 214.

17) 村上勉 [2018: p. 50]。

18) AN V, pp. 137-138. AN 6.44. (AN III, pp. 347-351.) の内容は、AN 10.75. に同じである。

gāmadhammā. So kālakato Bhagavatā vyākato `sakadāgāmī satto Tusitaṃ kāyaṃ upapanno` ti; Pettāpiyo me bhante Isidatto abrahmacārī ahosi sadārasantuṭṭho. so pi kālakato Bhagavatā vyākato `sakadāgāmī satto Tusitaṃ kāyaṃ upapanno` ti.

大徳アーナンダよ、世尊のお説きになった、かの教えはどのように了解したらよいのでしょうか、実に梵行者と非梵行者との二人は来世では同一種になると言われました。大徳よ、私の父であるプラーナは梵行者で世俗から遠く離れて住み、淫欲と在俗法を離れていた。彼が死ぬ時、世尊によって記別された「一來の有情の身として兜率天に再生する」と。大徳よ、私の叔父インダッタは非梵行者で妻と共に満足した。彼が死ぬ時、世尊によって記別された。「一來の有情の身として兜率天に再生する」と。

当該漢訳¹⁹⁾では、上記パーリの内容と同じく、在家の実践者は、梵行者と受欲者の二種類の系統が在ったことを述べている。

以上の様に、明確に在家者に梵行者と非梵行者が存在したことが示され、梵行者は、世俗から遠く離れて住み、淫欲と在俗生活を離れていたと語られている。在家者には、世間道と出世間道の二道の実践者がいたのである。

4 在家者の解脱・涅槃

初期經典の範囲で、在家者の解脱・涅槃を考察する時、AN 6.119. と AN 6.120. の二經の解釈が重要なポイントになる。

AN 6.119. と AN 6.120. に相当する漢訳はない。これまでの研究者は、この教説に注目しながらも「パラレルの漢訳がない」こともあり、この教説の存在自体が不可解であると、資料的価値を正当に認めていないように思える²⁰⁾。

AN 6.119.²¹⁾ は比丘に語っているが、内容は在家者が到達した境涯について

19) 『雜阿含經』(大二、二五七b)。

20) 藤田宏達 [1964: p. 64] 「これは、すでにリス・デヴィズ等の外国学者の注目を受けている様に、明らかに在家で解脱を得たものと解さねばならない……それにしても、在家阿羅漢を否定するパーリ上座部のニカーヤに、かかる記事が認められるのは、一体どうしたわけであろうか……かかる經説の存在は不可解と言わねばならない」と述べている。

21) AN III, pp. 450-451.

の教説である。

Chahi bhikkhave dhammehi samannāgato Tapusso gahapati Tathāgate niṭṭhaṃ gato amataddaso amataṃ sacchikatvā iriyati. Katamehi chahi?

Buddhe aveccappasādena, dhamme aveccappasādena, saṅghe aveccappasādena, ariyena sīlena, ariyena ñāṇena, ariyena vimuttiyā.

Imehi kho bhikkhave chahi dhammehi samannāgato Tapusso gahapati Tathāgate niṭṭhaṃ gato amataddaso amataṃ sacchikatvā iriyatī ti.

比丘達よ、六つの事柄を具えたタプッサ長者は如来の許で究竟に達した者であり、不死を見る者であり、不死を現証して、振る舞う者である。六つとは何か？

仏に対する不壊の淨信、法に対する不壊の淨信、僧伽に対する不壊の淨信、聖なる戒、聖なる智、聖なる解脱である。

比丘達よ、これらの六の事柄を具えたタプッサ長者は、如来のもとで究竟に達した者であり、不死を見る者であり、不死を現証して、行動する者であると。

引き続き AN 6.120.²²⁾では、この六つの事柄を具足して、不死を見、不死を悟り、解脱・涅槃に至った者として、アナータピンディカ長者、チッタ長者、釈氏マハーナーマ、ウッタ長者等の21人の在家者の名前を挙げている。AN 6.120.で在家者達が完成した六つの事柄とは、仏・法・僧の三宝に対して不壊の淨信を持つこと、清浄な戒を具えること、即ち四不壊淨（四預流支）であり、在家者の実践の基本であり、多くの独立の教説として説かれている。残る二つは、聖なる智、聖なる解脱である。まず四不壊淨について見ると、SN 55.22.²³⁾では、

Mā bhāvi Mahānāma ma bhāyi Mahānāma apāpakāṃ te maraṇaṃ bhavissati apāpikā kālakiriyā. Catuhi kho Mahānāma dhammehi samannāgato ariyasāvako nibbānaninno hoti nibbānapoṇo nibbānapabbhāro, katamehi catuhi.

22) AN III, p. 451.

23) SN V, p. 371. 当該漢訳はない。

マハーナーマよ、恐れるな、マハーナーマよ、恐れるな、あなたの死は悪くないもの、汚れのない命終があろう。実に、マハーナーマよ、4つの事柄を具えた聖なる弟子は涅槃に趣き、涅槃に傾き、涅槃に傾斜する。4とは何か。

Idha Mahānāma ariyasāvako Buddhhe aveccappasādena samannāgato hoti, Iti pi so Bhagavā, la-pe, satthā devamanussānam buddho bhagavā ti, Dhamme, Sanghe. Ariyakantehi sīlehi samannāgato hoti, akhaṇḍehi, la-pe, samādhisaṃvattanikehi.

マハーナーマよ、ここに聖なる弟子は仏に対して不壊の浄信を具えた者である。即ち「彼世尊は……天人師であり、仏であり、世尊である」と、法に対して（不壊の浄信を成就した者……）、僧伽に対して（不壊の浄信を具えた者……）、聖者所愛の戒を成就する者である。壊れない……禅定に導く（戒）によって。

釈尊は、四不壊浄を成就する聖なる弟子は涅槃に趣き、涅槃に傾き、涅槃に傾斜する。だから死を恐れることはない、在家者マハーナーマに説いているのである。

SN 55.53.²⁴⁾では、釈尊が優婆塞ダンマディンナ達に説いたものである。優婆塞ダンマディンナは、釈尊に「我々にとって長きにわたる利益や、幸福に過ごすための教えを説いてください」と話す。釈尊は「それでは、貴方達は、この様に学習すべきである。如来の教えは甚深、甚深の意味があり、出世間のものであり、空にふさわしいものである、時々これを成就して住むようにしよう」と話す。ダンマディンナはそれを聞いて、「大徳よ、子供の喧騒の中に住み、カーシ着や栴檀を用い、華鬘、香、塗香を持ち、金銀を享受する我々には、甚深であり、甚深の意味があり、出世間のものであり、空にふさわしいものである経を、成就して生活するのは難しい。大徳世尊よ、五戒によって生活する我等のために、教えを説いてください」と語っている。

釈尊は「ダンマディンナよ、仏……法……僧……聖者所樂の戒を成就しなさい。(即ち四不壊浄を完成しなさい)」と話す、ダンマディンナは「大徳よ、

24) S N V, pp. 406-408.

世尊が説く所の四不壊浄は、我等は成就しています。我々はこの教えと共に有ります」と答える。当該漢訳²⁵⁾は、達磨提離長者に四不壊浄と六随念を説く。この様に、四不壊浄は在家者にとって身近な実践であり、たびたび出家者や在家者に説かれていた。

残る二つ、聖なる智、聖なる解脱 (ariyena ñāṇena, ariyena vimuttiyā.) は、SN 48.46.²⁶⁾ で、釈尊が比丘達に説いたものでは、ariyāya paññāya²⁷⁾ と ariyā vimutti となっている。

Ariyāya ca paññāya ariyāya ca vimuttiyā. Yā hiss bhikkhave ariyā paññā tad assa paññindriyaṃ, yā hissa bhikkhave ariyā vimutti tad assa samādhindriyaṃ.

聖なる智慧と聖なる解脱による。比丘達よ、聖なる智慧とは慧根である。比丘達よ、聖なる解脱とは定根である。

Imesaṃ kho bhikkhave dvinnam indriyānam bhāvitattā bahulīkatattā khīnāsavo bhikkhu aññāṃ vyākaroti, Khīnā jāti nāparam itthattāyāti pajānāmī ti.

比丘達よ、二つの根を繰り返し自ら修習し、自ら修習すれば煩惱を滅ぼした比丘であり、悟ったことを記別し、生まれは尽き、さらにこの状態に戻らないことを私は知ったと。

この様に、聖なる智、聖なる解脱とは、慧根であり、定根であると説いている。

SN 48.2.²⁸⁾ は、

Pañcimāni bhikkhave indriyāni, katamāni panca. Saddhindriyam viriyindriyaṃ satindriyaṃ samādhindriyaṃ paññindriyaṃ. Yato kho bhikkhave ariyasāvako imesaṃ pañcannam indriyānam assādañca ādīnavañca nissaraṇam ca yathābhūtam pajānāti. ayaṃ vuccati bhikkhave ariyasāvako sotāpanno avinipātadhammo niyato sambodhiparāyano ti.

比丘達よ、五根あり、五とは何か。信根・精進根・念根・定根・慧根であ

25) 『雑阿含経』(大二、二七〇 a)。

26) SN V, p. 223.

27) paññā は (pra-√jñā) であり、ñāṇa は (jñā-ana) で、同じ語根からの派生語である (√jñā は、知る、察知する、認識 pra-√jñā は、知る、識別する、認識する)。

28) SN V, p. 193. 当該漢訳は、『雑阿含経』(大二、一八二 b)。

る。何となれば、比丘達よ、聖なる弟子は、五根の味と患と出離を如実に知る故に。比丘達よ、この聖なる弟子は聖者の流れに入った者（預流）であり、悪い場所に堕ちない性質の者であり、決定した者であり、正しい覺りに至る者であると言われると。

信根・精進根・念根・定根・慧根の如実智見で、聖なる弟子が聖者の流れに入ったという内容である。「仏に対する不壊の淨信、法に対する不壊の淨信、僧伽に対する不壊の淨信、聖なる戒、聖なる智、聖なる解脱」の「聖なる智、聖なる解脱 (ariyena ñāṇena, ariyena vimuttiyā.)」も、原始仏教の時代には、屡々、四衆に説かれていたと思われる。

以上の検討結果から、AN 6.119. と AN 6.120. の内容は、在家者にとっても出家者にとっても身近なものであり、折に触れ、様々の状況で説かれていたと思われる。当該漢訳が存在しないからといって、述べられている内容を疑問視することはないと考える。唯、その解脱・涅槃を成就した在家者が AN 6.119. と AN 6.120. で名前を上げている人達であったかどうかは、初期經典からは判断できない。

5 在家者ヤサの解脱

Vin では、初転法輪の因縁譚に引き続き、在家者ヤサの解脱について次の様に述べられている。

atha kho Yasassa kulaputtassa pituno dhamme desiyamāne yathādiṭṭhaṃ yathāviditaṃ bhūmiṃ paccavekkhantassa anupādāya āsavehi cittaṃ vimucci²⁹⁾
 atha kho Yaso kulaputto acirappakkante setṭhimhi gahapatimhi bhagavantam etad avoca: labheyyāhaṃ bhante bhagavato santike pabbajjaṃ, labbeyaṃ upasampadan ti. ehi bhikkhū `ti bhagavā avoca, svākkhāto dhammo, cara brahmacariyaṃ sammā dukkhassa antakiriyāyā `ti. sā `va tassa āyasmato upasampadā ahosi. tena kho pana samayena satta loke arahanto honti³⁰⁾ .

29) Vin I, p. 17 (1-3).

30) Vin I, pp. 17 (33-37)-18 (1-2).

父の為に説法している時、良家の子、ヤサは観たまま、知ったまま、境地を観察しつつ、その心は、執著が無く、諸漏より解脱した……時に長者の家長が去って間もなく、良家の子、ヤサは世尊に「尊師よ、私は、世尊の許で出家し具足戒を得たい」と言った。世尊は「来れ、比丘よ」（と言い）、「教えは善く説かれた、正しく苦しみの終滅のために、梵行を実践しなさい」と言った。これは、かの尊者（ヤサ）の具足戒である。その時、世間に阿羅漢は7人となった³¹⁾。

パーリ律では、ヤサは在家者の状態で解脱し、直後に出家している。この教説はヤサが在家者の状態で解脱したことを明確に示すものである。

『四分律』³²⁾は、法蔵部の伝持した広律であると言われているが、それによるとヤサの因縁譚は次の通りである。

爾の時、耶輸伽童子は世尊を礼し已って一面に坐し、世尊は漸くために説法し、勧めて歡喜心を発させた。所謂、法とは、布施・持戒・生天の法なり。欲不淨を呵って、出離を樂しみと為すことを讚歎す。即ち座上に於いて諸塵盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就し、自身果証を得たり。前んで佛に白して言さく。「我れ如來の所に於いて、梵行を淨修せんと欲す」と。佛言はく、「比丘來れ、我が法中に於いて快く自ら娛樂し、梵行を修し、苦源を盡せ」と。時に耶輸伽、即ち具足戒を受く……爾の時世尊、耶輸伽の父のために説法す。時に耶輸伽、身漏盡き意解けて、無礙智解脱を得る。爾の時、世間に七羅漢あり。弟子に六あり、佛を七と為すなり。

ヤサは耶輸伽童子とされている。ここでは、諸塵盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就し、自身果証を得て、具足戒を受け出家して、無礙智解脱を得て、阿羅漢となっている。「自身果証を得」と「無礙智解脱」の関係が解らないので在家の状態で解脱したか否か判然としない。

『五分律』³³⁾は、化地部が伝持した広律でヤサの因縁譚は次の通りである。

31) 当該漢訳は、『四分律』（大二二、七八九c）。

32) 大二二、七八九b-七九〇a。

33) 大二二、一〇五b-c。

耶舎は佛が父の為に四眞諦を説きたまえるを聞いて、漏盡意解せり。然る後、其父子をして相見えるを得させた。父は子に告げて言さく「汝、起ちて家に還れ、汝の母は汝を失い憂愁して殆ど死なんとしている」。佛は其父に告げて言わく「若し、人、漏を解脱するに、寧（いか）んぞ能く還た欲を受けるや不や」。答えて言さく、「能わず」と。佛言はく、「我、汝の為に法を説く。時に耶舎は諸法を觀じて漏盡き、心に解脱を得た。其父、佛に白して言さく「佛は我ために法を説きつつ、而も耶舎をして快く善利を得さしめたまえり」と。是に於いて耶舎は坐より起ち、佛に白して言さく「世尊、願わくは我に出家を與え具足戒を授けたまえ」。佛言はく「善來、比丘よ、」、乃至、鉢盂は手に有り。亦上に説けるが如し。爾の時、世間に七阿羅漢あり。

ヤサ（耶舎）は在家者の状態で心解脱を得ている。解脱の後で、具足戒を受け、出家し阿羅漢となっている。化地部は在家者の解脱を認めている。

『根本説一切有部律』³⁴⁾では

彼の長者をして預流果を得さしめた。其の子耶舎は、猶、俗時の種種珍寶莊嚴の具を著せるも阿羅漢果を得た……是の時、世間に七阿羅漢あり、佛は第一なり。爾の時、長者は忽ち其の子が佛前に在りて坐すを見、見已りて告げて曰く「童子、汝來れ、汝と共に家に帰ろう。汝の母が相憶して悲傷啼泣せり」と、爾の時、世尊は長者に告げて曰く「意に於いて云何、頗（も）し、已に無學智見を得て四諦法を證するに、彼の人、家に還り吐食を喰うありや不や。長者答えて曰く「不なり、大徳」と。

ここでは「耶舎は俗時の種種珍寶莊嚴の具を著せるも阿羅漢果を得た」とあるが、ヤサの出家についての記述がないので、在家者の状態で阿羅漢果を得たとは判断できない。

ところで、『増一阿含經』高幢品第二十四³⁵⁾（パーリ資料なし）では、釈尊は成道後鹿野苑で五比丘を教化し、次いで三迦葉を帰服せしめたとある。

34) 『根本説一切有部毘奈耶』（大二四、一二九b）。

35) 大二、六二二c。

爾の時教誨し、此の時無生の涅槃の法を成じ、亦無生・無病・無老・無死を成じ、是の時、五比丘、盡く阿羅漢を成じた。是の時、三千大千刹土に五阿羅漢有り、佛は第六爲り……爾の時、世尊、便ち優留毘村の聚落所に往至したまへり。爾の時、連若河の側に迦葉有り……五百弟子を將いて、日日教化す。迦葉を去ること遠からざるに、石室有り、石室の中に於いて毒龍有り、彼に在って止住す。爾の時、世尊、迦葉の所に至り、迦葉の所に到り已って語げて言く、吾、石室の中に寄在して、一宿せんと欲す……是の時、江迦葉及び三百の弟子、呪術の具を盡く水中に投じる。爾の時順水の下頭に梵志有り。伽夷迦葉と名く……大迦葉及び五百弟子と江迦葉及び三百弟子と伽夷迦葉及び二百弟子……是の時世尊、此の三事を以て千比丘を教化す。是の時彼の比丘佛の教を受け已って、千比丘、盡く阿羅漢と成る。是の時、世尊、千比丘の羅漢を得たのを見る。爾の時閻浮里地に千の阿羅漢及び五比丘有り。

この教説では、五比丘の次に阿羅漢果を得たのは、カッサパ三兄弟とその弟子たちでありヤサは登場しない。これらの資料から、ヤサ因縁譚を伝持した人々と、仏伝からヤサの因縁譚を除いた人々がいたことも窺い知ることが出来る。

6 在家者・マハーナーマの解脱

AN 3.73.³⁶⁾で、アーナンダは優婆塞マハーナーマに、心解脱・慧解脱について、次の様に説いている。

……Sa kho so Mahānāma ariyasāvako evaṃ sīlasampanno evaṃ samādhisampanno evaṃ paññāsampañño āsavānaṃ khayā anāsavaṃ cetovimuttiṃ paññāvimuttiṃ diṭṭh'eva dhamme sayamaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja viharati.

……マハーナーマよ、そもそも聖なる弟子はこの様に戒を具足し、この様に定を具足し、この様に慧を具足し、諸々の漏の滅尽により、無漏の心解脱、慧解脱を当にこの世に於いて自ら知って現証して、具足して住んでい

36) AN I, p. 220.

る。

アーナンダは、マハーナーマに「世尊によって有学の戒は説かれた。また世尊によって無学の戒は説かれた。また世尊によって有学の定は説かれた。また世尊によって無学の定は説かれた。また世尊によって有学の慧は説かれた。また世尊によって無学の慧は説かれた」と。聖なる弟子は諸々の漏の滅尽により、無漏の心解脱、慧解脱をこの世に於いて自ら知って現証して、具足して住んでいる」と説かれている。優婆塞マハーナーマに戒・定・慧を説き心解脱、慧解脱を説いている。ここでは、在家者に有学・無学の戒・定・慧が説かれ「聖なる弟子は、諸々の漏の滅尽により、無漏の心解脱、慧解脱を当にこの世に於いて自ら知って現証して、到達して住んでいる」と説かれている。この「聖なる弟子」には在家者が含まれると推測出来る。この点については既に述べた³⁷⁾。

AN 3.73. の当該漢訳³⁸⁾では、優婆塞マハーナーマは「自分は解脱している」と釈尊に語り、釈尊は阿難に「(マハーナーマ) は、諸の比丘と共に深義を論じ、能く甚深の佛法を、賢聖の慧眼に対し、深入することを得ている」と語っている。

また、AN 11.12.³⁹⁾では、マハーナーマは「多くの比丘は世尊の衣を作り、三ヶ月後に衣が整えば世尊は遊行に出られると言っている。私達は世尊が遊行で不在の間、どの様に修行すべきか」と釈尊に尋ねる。釈尊は、

……Saddho kho Mahānāma ārādhako hoti no asaddho, āraddhaviṛiyo ārādhako hoti no kusīto, upaṭṭhitasati ārādhako hoti no muṭṭhassati, samāhito ārādhako hoti

37) 村上勉 [2018: p. 41]。「聖なる弟子 (ariyasāvaka) は、i) 明確に出家者を指す、ii) 出家者か在家者か判断できない (両方を指しているとも考えられる) iii) 明確に在家者を指す、の3ケースが考えられるが、教説の内容から聖なる弟子は在家者であると判断できるもの及び、呼びかけ (vocative) が在家者の固有名詞 (姓名・職業) で始まる教説の聖なる弟子は在家者を指している」。

38) 『雑阿含経』(大二、二三八 c-二三九 b)。釋氏摩訶男は世尊の所に至り次の様に述べる。「世尊、私は世尊の説かれた内容を理解して正受した故に、解脱した。不正受ではない。先に正受し、後に解脱するのか。先に解脱し、後に正受するのか。正受と解脱が不前不後であり、一時に俱に生ずるのか」。その時世尊は黙しておられた……世尊は摩訶男が去って間もなく、尊者阿難に「摩訶男は、能く諸の比丘と共に深義を論じ、快く善利を得ている。能く甚深の佛法を、賢聖の慧眼に対し深入することを得ている」と説かれている。

39) AN V, pp. 328-332.

no asamāhito, paññavā ārādhako hoti no duppañño.

……マハーナーマよ、信がある者は、成功者となり、不信な者はそうでない。精進を起こした者は成功者となり、怠惰な者はそうでない。正しい自覚が現れた者は成功者となり、正しい自覚を忘れた者はそうでない。心統一した者は成功者となり、不統一者はそうでない。智慧ある者は成功者となり、劣慧の者はそうでない。

引き続き、この教説では、「六随念⁴⁰⁾を修習することにより、真理に関する明を得、真理を伴う喜悦を得、喜びの喜悦が生じ、喜悦の心の身は安穩となり、安穩の身は楽を感受し、楽ある心は定を得る」とある。

釈尊はマハーナーマに、信・精進・自己存在の正しい自覚（念）・心統一（定）・慧（智慧）の五つの事柄と六随念を修習すること、この十一の事柄により「明を得、喜悦を得、安穩を得、楽を得、定を得る」と説いている。

AN 11.12. の当該漢訳⁴¹⁾では、釈尊はマハーナーマに次の様に述べている。

當に五法を念じ精勤修習しなさい。摩訶男よ、當に正信を以て主とし、戒を具足し、聞を具足し、施を具足し、慧を具足することを本分とせよ。この五法に依り六念処を修習せよ。何が六か。如来を念じては「如來應等正覺乃至佛世尊」と。當に法・僧・戒・施・天事を念じなさい。これらを自ら行じて智慧を得なさい。この様に聖弟子がこれら十一法を成就する者は則ち学道を為し終に腐敗せず、知見に堪任し、決定に堪任し、甘露門にとどまり、甘露に近づく。全く疾く甘露涅槃を得ることは出来ない。例えば母鳥が卵を温めるように、隨時様子を窺い、爪や口で啄（つつ）くことによりその子を得るようなものである。

ここでは、甘露門にとどまり、甘露（涅槃）に近づくが、疾く甘露涅槃を得ることは出来ないと述べられている。AN 3.73. と AN 11.12. 及びそれらの漢訳で

40) 六随念：①如来を憶念すべし（Tathāgataṃ anussareyyāsi）②法を憶念すべし（dhammaṃ anussareyyāsi）③僧伽を憶念すべし（saṅghaṃ anussareyyāsi）④自ら戒を憶念すべし（attano sīlāni anussareyyāsi）⑤自ら棄捨を憶念すべし（attano cāgaṃ anussareyyāsi）⑥諸天を憶念すべし（devatā anussareyyāsi）。

41) 『雑阿含經』（大二、二三八 b-c）。

は、在家者の解脱・涅槃を具体的に述べている。

7 比丘の解脱と在家者の解脱は同じである

SN 55.54.⁴²⁾ は、まもなく遊行に出かける釈尊とマハーナーマの会話である。

Na kho te etam bhante Bhagavato sammukhā sutam sammukhā paṭiggahītaṃ
sappaññaṇa upāsakena sappaññaṇo upāsako ābādhiko dukkhito bāḷhagilāno
ovaditabbo ti.

大徳よ、世尊の面前で聞き、面前で受け取ったことはない「病気の有慧の
優婆塞が重病で苦しんでいる時、有慧の優婆塞によって、教誡されるべ
し」と。

Sappaññaṇa Mahānāma upāsakena sappaññaṇo upāsako ābādhiko dukkhito
bāḷhagilāno catuhi assāsaniyehi dhammehi assāsetabbo. Assāsatāyasmā
atthāyasmato Buddhhe aveccappasādena ……

マハーナーマよ、病気の有慧の優婆塞が重病で苦しんでいる時、有慧の優
婆塞によって、四蘇息法（四不壊淨）によって元気づけられるべきである。

友よ、元気をだせ、友には、仏に対して、絶対の淨信がある……

四蘇息法（catuhi assāsaniyehi dhammehi）によって、元気づけられるべきであ
る（assāsetabbo）とある。これは、内容から、四不壊淨の堅持によって元気づ
けるべきであると説いているのである。釈尊は優婆塞が病人の優婆塞を教誡す
ることを勧めているのである。

引き続き、

⁴³⁾ So ce evaṃ vadeyya, Brahmaloḷkā me cittaṃ vuṭṭhitaṃ, sakkāyanīrodhe
cittaṃ upasaṃharāmi, evaṃ vimuttacittassa kho, Mahānāma, upāsakassa āsavā

42) SN V, pp. 408-410.

43) ミャンマー第6結集版（Devanāgarī edition of the Pāli text of the Chātṭha Saṅgāyana: Published by Vipassana Research Institute: Dharmagiri, Igatpuri-422403, India）により So ce evaṃ vadeyya brahmaloḷkā me cittaṃ vuṭṭhitaṃ sakkāyanīrodhe cittaṃ upasaṃharāmi evaṃ vimuttacittassa kho Mahānāma upāsakassa āsavā vimuttacittena bhikkhunā na kiñci nānākaraṇaṃ vadāmi yadidaṃ vimuttiyā vimuttan ti. で翻訳した。

vimuttacittena bhikkunā na kiñci nānākaraṇaṃ vadāmi, yadidaṃ vimuttiyā vimuttinti.

彼がもし、「私の心は梵世より生み出され、心を有身の滅尽に関して集中している」とこの様に言うなら、マハーナーマよ、この様に漏より心解脱している優婆塞は、心解脱している比丘と何ら相異がないと。即ち、解脱と解脱に何等相異がないと私は説く。

「即ち、(優婆塞の)解脱と(比丘の)解脱に何等相異がない」と(yadidaṃ vimuttiyā vimutti.)とある。これは在家者の解脱を考察する場合に、非常に重要な教説である⁴⁴⁾。これだけで理解するのは難しいので yad idam vimuttiyā vimutti の他の用例を見ると、

MN 90. (*Kaṇṇakatthala-Suttaṃ*)⁴⁵⁾ で yad idam vimuttiyā vimuttinti. が説かれ、釈尊が譬喩を用いて説明している。MN. 90. は釈尊がコーサラ国王パセーナデに四姓の平等を説いたものである。

「たとえば、大王よ、人が乾いたサーカ樹の薪を取って火を起こそうとし、炎が現れる、また、他の人が乾いたサーラ樹の薪を取って火を起こし炎が現れる、また、他の人が乾いたマンゴー樹の薪を取って火を起こし炎が現れる、また、他の人が乾いた無花果樹の薪を取って火を起こし炎が現れる」、

Taṃ kim maññasi, mahārāja? Siyā nu kho tesam aggīnaṃ nānādāruto abhinibbattānaṃ kiñci nānākaraṇaṃ, - acciyā vā acciṃ, vaṇṇena vā vaṇṇaṃ, ābhāya vā ābhaṇ ti ?

No h' etaṃ, bhante. Evam eva kho, mahārāja, yaṃ taṃ tejaṃ viriyā nimmathitaṃ padhānā `bhinibbattaṃ Nāhaṃ tattha kiñci nānākaraṇaṃ vadāmi, yadidaṃ vimuttiyā vimuttin ti.

「大王よ、そのことをどう思いますか？これら種々の木材によって起こっ

44) SN 55.54. の当該漢訳：『雜阿含經』(大二、二九七c)では、「彼の聖弟子、已に能く有身の顧念を捨離して、涅槃を樂はば善しと歎じて隨喜せよ。是の如く難提、彼の聖弟子、先後次第して、教誡教授し、起こらざる涅槃を得ること猶ほ比丘の百歳の壽命もて、解脱涅槃するが如くならしめよ」とある。

45) MN 90. (MN II, p. 130.) 当該漢訳：『中阿含經』(大一、七九二c—七九五b)。

た火に何か相異がありますか。焰と焰に、色と色に、光と光に」。「ありません、尊師よ」。「大王よ、ちょうどその様に、その炎は精進により起こされ、努力によって生起する。私はそこに、即ち解脱と解脱には相異がないと説くと (yadidaṃ vimuttiyā vimuttin ti.)。

MN 90. は、四姓の平等を説き、人々の解脱には何等差異がない、解脱は同じであると説いているのである。

以上の様に初期經典では、在家者の解脱は、明確に説かれている。ところが、在家者の得果として、阿羅漢 (arahant)、或は、阿羅漢果 (arahatta) という術語は出てこない。内容はもちろん解脱・涅槃した境涯、即ち、阿羅漢を指しているのであるが、阿羅漢という術語が説かれない。在家者は、あくまでも供養する人であり、出家しないと阿羅漢 (arahant)・供養に値する人にはなれない⁴⁶⁾。このことから、在家者には阿羅漢、阿羅漢果の術語は使われず、同じ境涯を解脱・不死・涅槃の語を使ったと思われる。在家者で、輪廻苦から解脱し、不死・涅槃の境涯に到達した者がいたが、沙門・バラモン・出家者への畏敬の念、或いは斟酌から、在家者の解脱を述べる時は阿羅漢の術語は使わなかったと思われる。それでは、何故、ヤサ因縁譚では阿羅漢の術語が使われているのか。上記のヤサ因縁譚から考察すると、阿羅漢は、パーリ律では、ヤサの「如実智見」→「解脱」→「具足戒を受け出家」→「阿羅漢」であり、『五分律』(化地部) は、「如実智見」→「解脱」→「具足戒を受け出家」→「阿羅漢」となっている。両資料とも、ヤサは在家の状態で解脱し、直後に出家して阿羅漢となっている。これらの資料でも、在家者の解脱と出家者の阿羅漢の境涯が区別して説かれている。

46) 村上勉 [2018: p. 46]。『arahant の語の成り立ちに理由があると思われる。arahant、arahatta も、√arh から派生した語である。√arh は「……に権利を有す」、「値する」、「相当する」とある。従って、arahant は「供養に値する人」、「供養する価値のある人」という意味が適当であると思う。一方、在家信者・優婆塞 (upāsaka) は、upāsati (upa-√ās) から派生した語で「仕える」、「近坐する」、「奉仕する」の意味である。これらから考察すると、在家信者・優婆塞 (upāsaka) は、あくまでも供養する人であり、出家しないと阿羅漢 arahant・供養に値する人にはなれないのである。在家者が在家者に布施することは有り得ないのである。このことから、在家者を含む、修行階梯の教説では、阿羅漢、阿羅漢果の術語は表れず、同じ境涯を解脱・不死・涅槃の語を使ったと思われる』。

8 結 語

初期經典では、在家の実践者には、梵行者と非梵行者が存在したことが示されている。梵行者は、日常的に八斎戒を修習し、在家の穢れを離れて生活する出世間道を歩み、非梵行者は施・戒・生天の実践により、在家生活を楽しみ、善処・天界に生まれることを目指した世間道を歩んだ。原始仏教の時代は、この二道の実践者がいた。

在家者が解脱したと明確に示された、ヤサ因縁譚を検討すると、パーリ・漢訳で一致していることは、ヤサが、釈尊を含め7人目に阿羅漢となったこと、ヤサは在家の状態で解脱し、直後に出家して阿羅漢となっていることである。ヤサ因縁譚では、在家者の解脱と出家者の阿羅漢の境涯を区別して説かれている。

AN 3.73. では、在家者に戒・定・慧が説かれ「聖なる弟子は諸々の漏の滅尽により、無漏の心解脱、慧解脱をこの世に於いて自ら知って現証して到達して住んでいる」と説かれている。AN 3.73. の当該漢訳では、在家者マハーナーマは「自分は解脱している」と釈尊に語り、釈尊はマハーナーマの解脱を否定していない。また、S N 55.54. では、釈尊は、在家者の解脱と出家者の解脱とに何等相異がないと説き、在家者の解脱を認め、有慧の在家者が重病の有慧在家者に教えを説くことを勧めている。

しかし、原始仏教の時代は、阿羅漢とは供養に値する人であった。在家者で、輪廻苦から解脱し、不死・涅槃に到達した者がいたが、沙門・バラモン・出家者への畏敬の念、或いは斟酌から、在家者に阿羅漢の術語は使わなかったと思われる。

以上

[略号表]

AN *Āṅguttara- Nikāya* PTS

MN *Majjhima- Nikāya* PTS

Vin *Vinaya-piṭaka* PTS

DN *Dīgha-Nikāya* PTS

SN *Saṃyutta- Nikāya* PTS

Sn *Suttanipāta* PTS

Th *Theragāthā* PTS
PTS Pāli Text Society, London.

ThI *Therīgāthā* PTS
大 『大正新脩大藏經』

…… 中略

[参考文献]

中村元 [1993] 『原始仏教の思想・I』 中村元選集決定版・第15巻 春秋社 1993 p.972

平川彰 [1990] 『初期大乘仏教の研究・II』 平川彰著作集・第4巻 春秋社 1990 p.459

村上勉 [2018] 「原始仏教に見られる在家者の実践」、『佛教大学大学院紀要』46号 2018
pp.37-52

藤田宏達 [1971] 「原始仏教における生天思想」『印度学仏教学研究』19-2. 1971 p.414

藤田宏達 [1992] 「原始仏教における信」『仏教思想11・信』平楽寺書店 1992 p.93

藤田宏達 [1964] 「在家阿羅漢論」『結城教授頌寿記念 佛教思想史論集』大蔵出版 1964
pp.69-70

舟橋一哉 [1970] 「出家道と在家道とにおける真理観の相異」『佛教の根本真理』三省堂
1970 pp.175-196

中村元 [1980] 『ブッダ最後の旅』岩波書店 1980 pp.218-219